

(3) 校内研究計画

1 研究主題

自ら学びを進めようとする児童の育成

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を意識した単元づくりを通して～

2 主題設定の理由

これからの日本は、生産年齢人口の減少、人工知能（AI）の飛躍的な進化、グローバル化の進展や技術革新等により、複雑で変化が激しく、未来の予測困難な時代となる。そのため、これからの社会をつくる子どもたちには、様々な変化を前向きに受け止め、多様な他者と互いのよさを生かしながら、自ら将来を切りひらいていく資質・能力が求められている。そこで、文部科学省は、「知識及び技能」の習得と「思考、判断力、表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養という、資質・能力の三つの柱の育成がバランスよく実現できるように留意する必要があることを述べている。また、授業づくりにおいては「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が大切であることを述べている。

本校は、豊かな自然に囲まれた全校児童62人の小規模校である。児童は日頃より保護者、地域の方々から温かな愛情を受けており、大変素直で純朴である。しかし、素直すぎるがために、大人からの指示に頼りがちな児童が多い。また、学習に対しても真面目に取り組んではいるが、やや受動的であり、自ら課題を見つけたり、その課題に対して解決しようと自ら進めていこうとしたりする児童は少ない。本校では、5年前より、特別活動に焦点を当てて校内研究に取り組んできた。特別活動の中で「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実について研究を進めてきた。その成果として児童が、見通しを持って学習に取り組めるようになったこと、自分にとって何が最適な学びの方法や内容なのかを考えることができるようになってきたことが挙げられる。その成果を踏まえて、昨年度から特別活動の枠を超えて他教科でも「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実について授業実践ができないか試みたところである。見えてきた課題は、児童主体の単元づくりが疎かになってしまい、児童が受け身の学習になってしまったことである。単元の中で児童がいかに自分の課題を意識して学習に取り組んでいくか、課題を解決するためにどのように自ら学びを進めていくのか、もっと児童に学びを委ねることを意識していく必要がある。また、振り返りの視点の明確化が不十分で次時につなげられていないことも挙げられる。そのため、振り返りの中身に目を向け、視点を明確化していく必要がある。

以上より、今年度も引き続き様々な教科や単元で実践を広げ、児童が自ら学びを進める力を育てるために「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を意識した単元づくりを研究していきたい。

研究の柱としては、「児童と共につくる学びのロードマップ」、「振り返り内容の充実を図る指導の手立て」の2つに絞り、研究を進めていきたいと考える。

3 研究の目標

課題解決型学習の単元づくりに力を入れ、学びのロードマップの作成や振り返りの視点を明確化する。

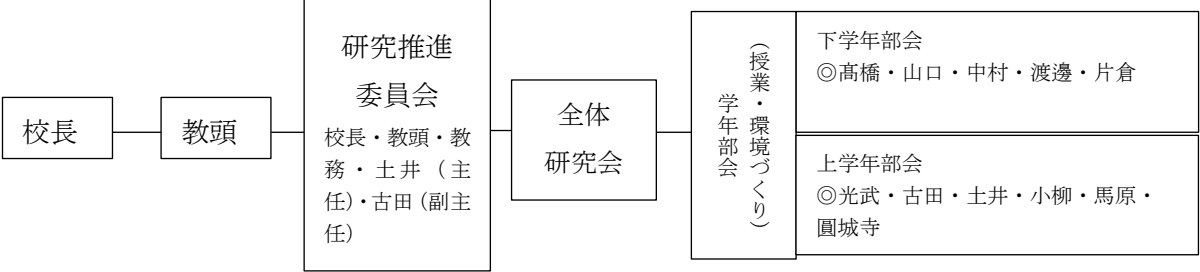
4 研究の仮説

様々な教科の単元づくりにおいて、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を意識した教師による単元開発や効果的な振り返り活動を仕組んでいくことで、課題解決型学習が充実し、自ら学びを進めようとする児童が育つであろう。

5 研究の内容と方法

- (1) 授業力向上のための研修
 - ① 授業の実践・・・学年部、全体による指導案検討会
授業研究会（全体研5、6回）
 - ② 理論研究・・・講師招聘による理論研究
- (2) 環境づくり・・・校内掲示の工夫
- (3) アンケート等の調査の実施・・・児童の実態及び変容の調査

6 研究の組織



研究推進委員会では、校内研究の方向性等を検討する。また、学年部会においては、授業・環境づくりに関し、検討・実施を行い、研究を進めていく。

7 研究の計画

4月	研究推進委員会、全体研究会	10月	全体研究会（全体授業研③～⑥）
5月	学年部会	11月	全体研究会（全体授業研③～⑥）
6月	意識調査の実施	12月	全体研究会（全体授業研③～⑥） 意識調査の実施・分析
7月	全体研究会（全体授業研①②：主任提案授業） 意識調査の分析	1月	学年部会（研究のまとめ）
8月	学年部会 全体研究会（指導案検討・講師招聘による理論研究）	2月	全体研究会（研究のまとめ）
9月	全体研究会（全体授業研③～⑥）	3月	研究推進委員会